

編集後記

私たちの白鷹町には、遙かむかしから美しい山々と、清冽な流れがあった。ここを選んで生活の本拠とした縄文人は、我々の祖先であったに違いなく、そこから現代に至る迄の数百の世代に、祖先たちは必死に生活をいとなみ、遺跡と伝承とあまたの資料による、かがやかしい歴史を後世へのおくりものとした。遺されたものはそれ自体完全であり、普遍的なものである。然し、素材を選択し、適所に配し、一編の通史をなすことは、祖先の歴史に対するふかい愛情と、執拗なまでの努力と、手続きをまたなければならぬ。ともなつてそこには、歴史に対する普遍的立場が要求され、事実の理解も、又は仮説を設定するにしても、地域の人々の共感を喚ぶことに十分な配慮を怠ることは、祖先たちの歴史が、人々から離れ去る危うさを恐れなければならない。

町史は一つの地域史である。小地域の歴史内容は、広さも深さも地域規模に準ずるものではない。小地域といえども一つの天地であるがゆえに、祖先たちの機能のすべて、行為行動も無限のものを持ち、底辺には常により広地域の歴史と、有機的なかわりを保ちながら存在する。

白鷹町の誕生間もない時期に、「白鷹町郷土史研究会」が結成された。戦後、地域の歴史に関する興味と研究の、時代的な高まりの中で、当地域においても、『荒砥町誌』（昭和二十九年）『鮎貝の歴史上巻』（昭和三十年）、がすでに刊行されており、十王地区においても、編集作業が途上にあつた時である。地域の歴史事象が、一地域に孤立して発生し、進展をみることはさらに有り得ず、必ず時代の所産である限り、より巨視的立場が求められる。この要求の最小の限界として、旧一町五ヶ村を合併した町全域を、理解の対象とした結成発足であつた。一地域や、特定の個人が伝える資料が、如何に豊富であつても、祖先たちの全体像を明らかにすることは不可能である。

たとえ小片の資料といえども、多くの地域から多彩な資料が集められることよってのみ、完全に近づくことを期待できる。この期待を目標にした研究会は、会員相互の交流に積極的な役割を果たし、一般への啓蒙を呼びかけ、特記すべき数々の事業のあったことは勿論であった。以上の情勢のなかで、蚕桑、東根の両地区に、郷土史編纂の機運をたかめ、さらに強力な推進をみたのも、研究会の後押しがあつたればこそその事であつた。一方、『萩野史話』の原稿もひそかに進められていたのも、やはり無縁のことではなかつた。ここに、『滝野誌』（昭和六年刊）を加えると、各地区の郷土史が出揃う状態となり、今こそ、各地区郷土誌を総合した町史の、編纂の機運と条件が、いよいよ緊迫しつつあることを感じるものであつた。

町史編纂の準備がすべて整い、五年後の原稿完成を目指し、原稿執筆者三名、協力員一名の委嘱がなつて、第一歩をふみ出したのは、昭和四十六年十二月の末であつた。作業はまず、資料の整理から始めなければならぬ。各地区公民館には旧町村の役場文書が大量に所蔵されており、中には近世の村方文書も多く含まれている。又、各地区の旧家の所蔵文書は、大部分が近世文書である。作業の結果、『白鷹町史資料目録』一〜三集を得た。登載の資料文書数は、五、五二一点である。このほか、都合によって未登載の資料も数多くあつた。これら資料文書の中には、既刊の各地区郷土誌に利用されているもののほか、貴重な新資料も数多く発見され、『白鷹町史』の内容を、さらに充実に導いたことは、大きな収穫とするものである。なお以上の資料の中には、『山形県史』近世資料1（資料篇一六）に登載され、広く県の歴史学のため大きく寄与するものも、多く含まれていることは、郷土のためにも誇りとなるものである。

資料の整理は、関係者の未熟とは云いながら、容易な作業ではなかつた。一字、一句の古文書解説に苦勞したこと、必ず少くはなかつた。然し、苦勞の体験の中から、編集の目が少しずつ開けてゆく喜びはあつた。資

料所蔵者には、整理の需めに対して、快諾と協力を惜しまれなかったばかりか、その後も、編集者が数回にわたり、必要資料の閲覧にも便宜を与えられたことは、町史完成の上に、大きなかなめとなったことであり、非常に喜びであった。

郷土の祖先たちの、長い歴史の中の遺産を調べることは、戦前は専ら郷土史と呼ばれた。この期間の研究とその執筆は、依頼による学究者のものが多かった。戦後、地方史と言われ、最近では地域史と呼び名が変るに従い、研究も執筆も、地域の人たちによることが多くなる。地域史の研究には、実際、その地域の生活者による理解が、最も必要であることが多く、一つの地名、一人の氏名、固有名詞、代名詞も、地域生活者の理解が、より広く、深く、かつ具体的となり、また、一つの事象から敷衍される領域にも、おのずから相違の生れることになる。この所を強調するならば、地域史の理解はより限られた小地域、即ち、研究者の郷土が最もふさわしいものとなる。

当町史の執筆にあたったわれわれは、いずれもこの地域に生れ、育ち、然かも同地域における長期の生活体験者である。この点、執筆の資格は充分と云える。然しながらわれわれは、ともに定まった職業を持ち、地域史の理解に必要な知識にとぼしく、文筆の能力も不足である。従って、郷土祖先の遺産である歴史と、広地域とのかわり、時代的な一般性への位置付けなど、全く及ぶところではなかった。有形、無形のものを見問わず、すべて学問の裏付を必要とするものが多く、われわれにとって、重い負担であるばかりでなく、最初からその任に充分な疑いがあり、今日の成果についても、あらためて菲才の感がしきりである。

本町史は、委員三名による共同執筆によって進められた。担当の区分は、つぎの通りである。

第二章	原始時代	〃
第三章	古代	〃
第四章	中世	〃
第五章	近世	荒川 幸一
第六章	近代	奥村 幸雄
第七章	現代	〃
第八章	民俗	〃

なお、右のうち都合によって、第五章近世第三節藩政中期第1項及び第四節第8項の一部は、編集事務局原敬一が執筆し、第六章近代第一節、第二節、および第七章現代第五節、第六節は委員荒川幸一、また第六章近代第十節、第七章現代第七節（第1・2項は、奥村幸雄、金田章の共同執筆）は委員金田章が執筆している。最後の附表1・2は、委員および協力員、編集事務局の共同になるものである。

町史の編集にあたり、多くの資料の中から取捨選択がおこなわれる時、必ず編集者の個性が匂う。尤も、よりよき個性は、おのずから普遍性の備わることでも確かであろう。戦後、わが国の歴史を観る目は、大きな旋回をとりあげている。即ち、歴史は一部の人の作るものではなく、より多くの庶民の生活力の中から芽生え、そして形成されるとう史観である。この態度は、地域史の場合、郷土の祖先である庶民が主役である限り、特に要求されるものである。編集執筆にあたり、この点については努力を怠らなかつた。然し町民のための町史であるためには、郷土の人々が抱く祖先の歴史に対する夢を尊重すべきものもあり、資料の取りあげ方にも、各地区の平均化を考慮したことも事実である。

町史の原稿は、予定された五十年末に大凡が完了し、執筆者は大きな安堵感に浸った。それも束の間、執筆の不備に気付き、歎息もしなければならなかった。これは校正の段階にあたり、訂正も補筆も可能なところであっても、その枠を越えるところもあり、ついに、不備の誹りの免かれないことを痛感する。

この町史が計画された時から、原稿が完成して活字になる迄の間、実に多くの方々から、好意と指導と鞭撻を、公私ともに惜みなく寄せられたことは、編集執筆に携った者として、深く肝に銘じなければならぬところである。山形大学の諸先生をはじめ、県史編さん室の各先生、米沢市立図書館、山形大学附属郷土博物館、県立博物館、ほかに諸先学の著書に負うところは極めて大きく、又、地域の方々には直接に、非常に世話いただいたことに深く御礼を申し上げたい。特に、資料所蔵の方々との協力に対し、いよいよ感謝の念を、終生とも禁じ得ないものがある。最後に、古文献の引用もあり、不慣れかつ整わないわれわれの原稿を、高度の技術を要する出版について、立派に刷りあげられた田宮印刷所のみなさん、努力と技術に対して、これまた深く感謝申しあげる次第であります。(荒川記)

白鷹町史編纂委員会委員

委員長 渡部 富栄

副委員長 鈴木 清一

五十公野 達美

小川 大三郎

菊地 保助(前)

今吉 太郎(故)

紺野 貞郎

佐藤 彰容(前)

鈴木 茂

新野 武雄

松野 久八

横沢 史郎

渡部 代吉(前)

(アイウエオ順)

白鷹町史編集委員

主任 荒川 幸一

金田 章

奥村 幸雄

白鷹町史編纂協力員

金田 宗一(蚕桑)

布川 勝雄(〃故)

本間 興一(鮎貝)

小関 三郎(〃)

安久津 久造(荒砥)

保科 徳藏(〃)

海老名 義太(十王)

斎藤 清玄(鷹山)

大滝 名左衛門(〃)

菅原 道直(東根)

菊地 藤兵衛(〃)

白鷹町史編纂事務局

教育長 横沢 史郎

(前) 佐藤 彰容

社会教育係長 金子 昭一

(前) 梅津 元昌

主 事 原 敬一

白鷹町史 下卷

昭和五十二年二月二十二日発行

白鷹町史編纂委員会
編さん

白鷹町史編集委員会

発行 白鷹町

山形県西置賜郡白鷹町大字荒砥甲八三三
電話 ○二三八八(五)二一一一(代)

印刷所 (株) 田宮印刷所

山形市六日町四番三号
電話山形(22)八一二四代)
製本 中山製本所